

5. 京都府山岳連盟

ー海外の高峰をめざすー (1)

東京大学卒業後、家業を継ぐために伊勢藤紙工(株)に入社します。学んできた英語、ドイツ語を駆使して、ヨーロッパでの大きな商談をまとめ、会社の発展に貢献します。結婚して、子供も授かり、多忙な日常を日々を送りました。

一方で、京都府山岳連盟に所属し、国体等に出場する京都選手団への支援やヨーロッパの名峰を登るなど山とのつながりは絶えませんでした。



京都府山岳連盟・京都カラコルムクラブ ー海外の高峰をめざすー

1947年「京都山岳協会」設立

会長 森本次男

1948年「京都府山岳連盟」に改称

会長 今西錦司

1950年 小谷隆一京都府山岳連盟加入

1963年 連盟海外登山委員会結成

1965年 京都府山岳連盟登山隊「ディラン峰」試登

京都カラコルムクラブ結成

1966年 北山・直谷の「麗山荘」に森本次男氏レリーフ建立

1980年 中国登山協会第一次訪日代表团歓迎会

(喬加欽主席・史占春副主席・王富洲秘書長来日)

1980年「コングール山」先遣隊遠征(総隊長:小谷隆一)

1981年 日本コングール登山隊遠征(総隊長小谷 隆一)

7月嶋満則・寺西洋治・松見新衛の三名北陵で
消息を絶つ

1983年 小谷隆一京都府山岳連盟会長就任

1986年 京都府・中国陝西省友好府省締結三周年記念

日中合同登山隊「太白山」登頂

1989年 日本コングール登山隊

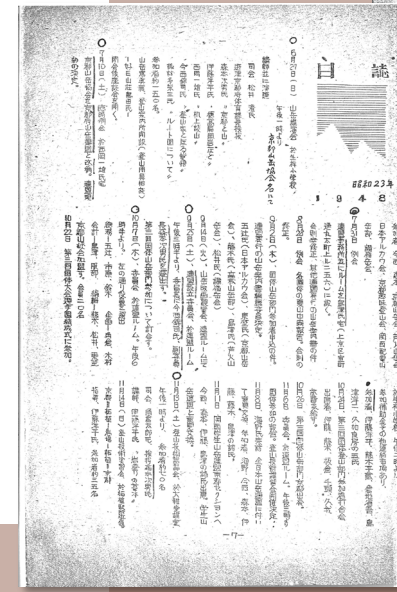
「コングール山」北稜から全員登頂

2003年 小谷隆一京都府山岳連盟会長退任(名誉会長就任)

京都府山岳連盟の歩み(沿革)等より抜粋

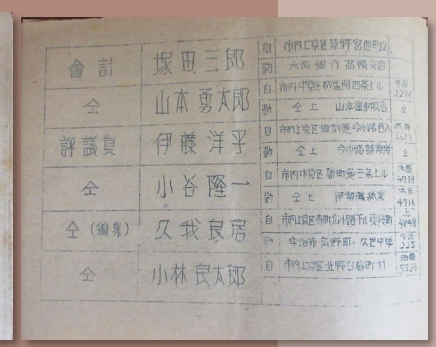
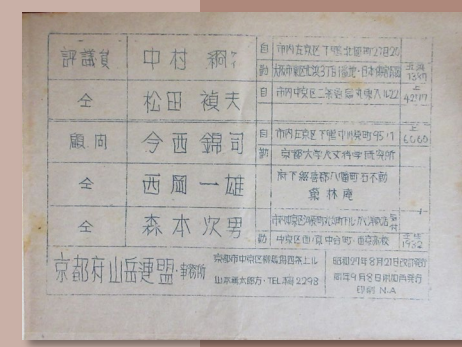
参考資料

(複写)
『京都府山岳連盟報告』
3
京都府山岳連盟
1949(昭和24)年2月1日発行
(小谷コレクション)



参考資料

『昭和二十七年度
KAL
名簿』
京都府山岳連盟
1952(昭和27)年
(小谷コレクション)



※ 1952年 小谷は評議員

展示資料No. 27

『山日記』

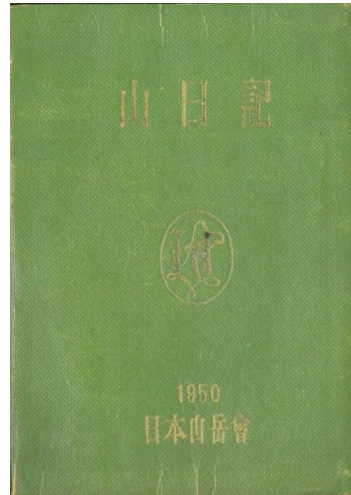
1950

日本山岳会

茗溪堂

1949年12月10日発行

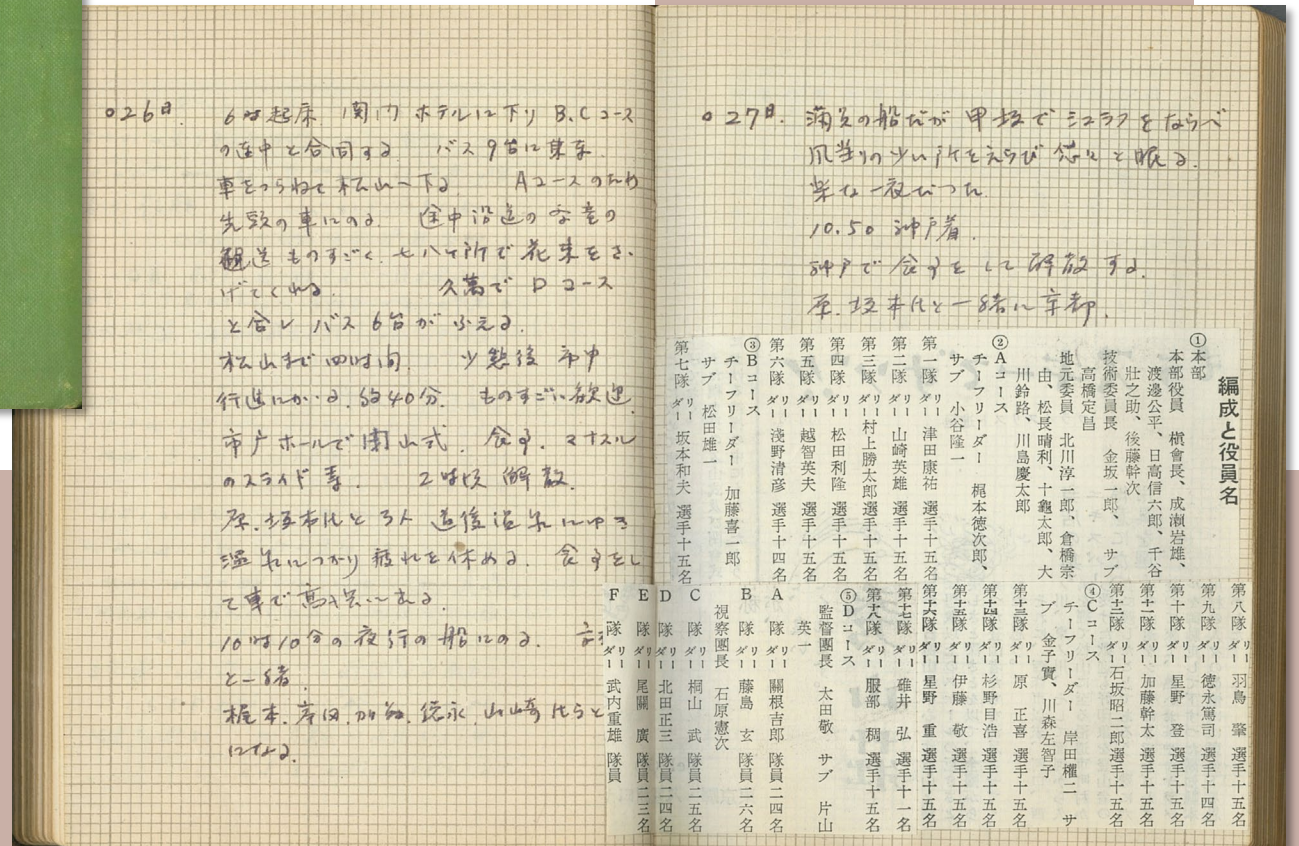
小谷達雄氏 蔵



1951年～1953年までの山行記録を詳細に記している。

社会人になってからも、京都北山や北アルプスに登り、冬は欠かさずスキーに出かけた。

京都府山岳連盟の役員としても、国体登山の競技リーダー、予選選考委員などとして活動する。



『岳人』第88号 1955年刊に掲載された作品「スイスの旅」とほぼ同文

『山なみ帖』「アルプス紀行 一九五四年」より

山ふところへ

(前略)

ドイツとイギリスの二国を二ヶ月余旅行し、慣れない外国の旅と仕事の難しさのために忙しい日々を送っていただけに、スイスの国内に入った時は日本に帰ったような嬉しさを覚えた。沿線には丘陵や深い溪谷がならび日本の風景に似ていて、中央線の富士見付近、或いは信越線の浅間山麓を想い出させる風景だ。約二時間、列車は山野を走って暮れのころチューリッヒの街に入った。

私の大きな旅行鞆の中には、ミュンヘンの有名な登山用具店アスミュで求めたルックザックと山靴とがしのばせてある。高木正孝先輩に書いていただいたグリンデルワルトのかつての名ガイド、エミール・ストイリ宛の紹介状も大切にしまっている。多忙な旅行中少しでも余裕をつくってスイスの山に登ろうというのが私のひそかな願いだった。ヒマラヤへ入れない山男の慰みごとかもしれない。グリンデルワルトへ行ってヴェッターホルン、ユングフラウの二山、さらにツェルマットからマッターホルンに登ろうという計画だ。

(後略)



展示資料No. 28

『岳人』

第88号

中部日本新聞社

1955(昭和30)年8月1日刊

小谷達雄氏 蔵



ヨーロッパの山へ

1954年ヴェッターホルン・ユングフラウ・マッターホルン登頂



ヴェッターホルン [Wetterhorn]
3,690 m スイス

ユングフラウ [Jungfrau]
4,158 m スイス

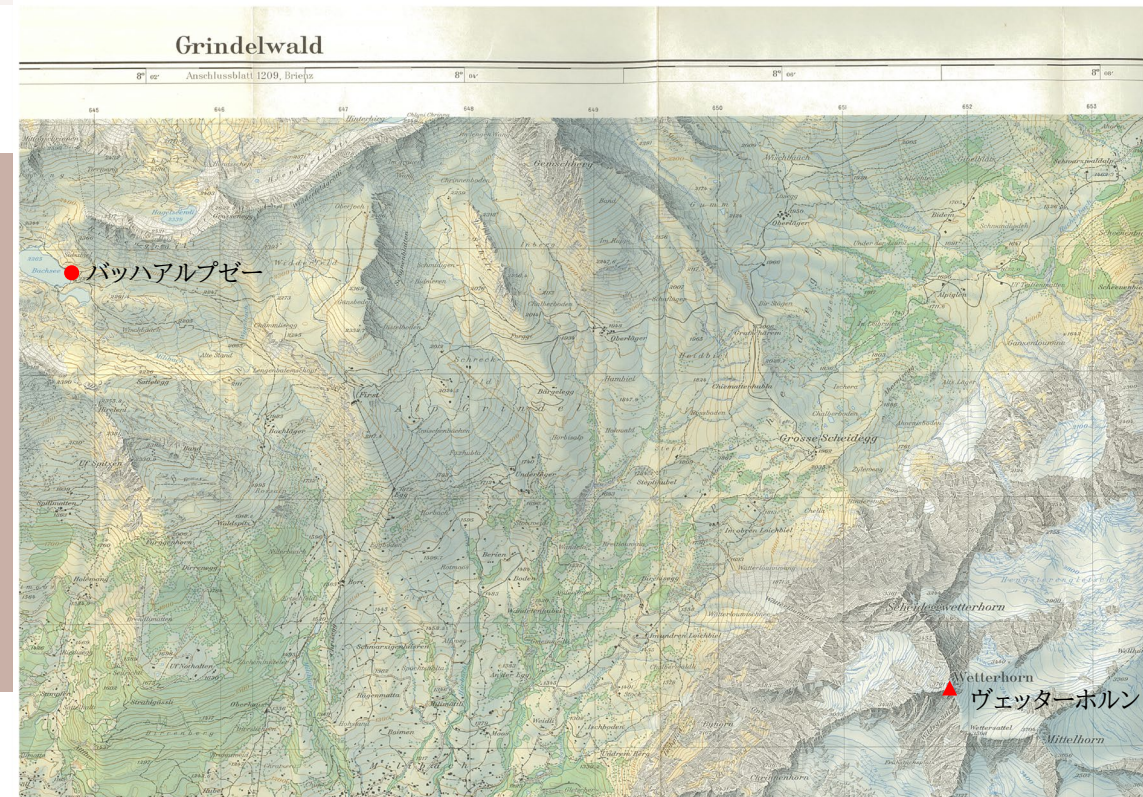
マッターホルン [Matterhorn]
4,478 m スイス・イタリア

展示資料No. 29

LANDESKARTE
DER SCHWEIZ
1:25 000
GRINDELWALD
BLATT 1229
MIT RELIEFTON
1973

スイス全国地図
1:25,000
「グリンデルワルト」
シート番号 1229
ぼかし入り
1973年版
(小谷コレクション)

ヴェッターホルン、ユングフラウの山岳エリアを含む



バツハアルプゼーから見た
ヴェッターホルン(1988年撮影)

写真(小谷隆一アルバムより)
小谷達雄氏 蔵

5. 京都府山岳連盟

－海外の高峰をめざす－ (2)



当時のヒマラヤ山群の初登頂ブームに乗って、山岳連盟でも海外未踏峰制覇の機運が高まっていました。小谷を中心にヒマラヤ山群への登山計画を練っていきました。

紆余曲折を経て、カラコルム山脈のディラン峰への遠征が決まり、小谷は隊員9名の隊長として挑むこととなります。

登山許可の必須条件だった同行医師として、松高後輩の北杜夫を半ば強引に引き込みます。北の代表作『白きたおやかな峰』が生まれるはじまりでした。

結果として初登頂は失敗に終わりますが、遠征登山隊メンバーで京都カラコルムクラブを結成し、その後もヒマラヤの未踏峰・未踏ルート of 攻略に挑戦します。

ヒマラヤの山へ

展示資料No. 30

1:50 000
MINAPIN RAKAPOSHI RANGE
NW-KARAKORUM
1967

1:50,000
「ミナピン（ラカポシ区分）」
南西カラコルム
1967年版

(小谷コレクション)



ディラン峰 (Diran) 7,273m

場所 : パキスタン
 ギルギット・バルティスタン州
位置 : 36° 7' 0" N, 74° 40' 0" E
初登頂 : 1968 年 オーストリア登山隊
登頂者
 ライナー ゲシュル
 ルドルフ ピシinger
 ハンス シェル

〔『山なみ帖』「岳友ハンス・シェル」〕

ディラン頂上を望む (1965年撮影)

写真 (小谷隆一アルバムより) 小谷達雄氏 蔵



▲ ディラン

1959年 ドイツ隊 (隊長シュナイダー) による測量

ディラン峰

京都府山岳連盟が海外遠征登山を計画したのは、他都市の連盟と比較して早い時期であった。地元の京都大学学士山岳会が活発な海外遠征を行なっており、その刺激を受けていたためであろう。昭和三十五年頃からすでにヒマラヤ登山の計画を始め、京大の今西錦司先生の指導をあおいでいた。

私どもが最初に目標としたのは、ガルワール・ヒマラヤの未登峰であるティルスリであった。しかし、この山はインドとチベットの国境近くにあり、何度かインド政府と折衝をかさねたが国境問題が理由で許可を得ることができず、そのためにやむをえず目標の地域をカラコルムに変更したのだった。

昭和三十七年、バキスタン政府に対してカラコルムのK6を申請した。私は十月にカラチを訪れ、日本大使館の牧内恭人氏に依頼して国防省へも出かけたが、容易に許可は得られなかった。翌年の秋も欧州出張の帰途カラチに立寄り国防省と折衝したが、この年には目標をK6からディランに変更していた。

(中略)

私にはその山の美しさは意地の悪い美女の美しさに思えてならなかった。しかし今では、われわれ十名の隊員を無事下山させてくれた心の暖かさをほのかに感じるようになってきた。頂に登るのが登山の目的ではない、と初登攀に失敗した隊長は思っている。そして、これからも足で登るだけの登山ではない山登りをやってゆきたいと、今でも考えているのである。

京都カラコルムクラブ結成



遠征隊メンバー

小谷 隆一 (京都山岳連盟参与)	…小滝 隊長
塚本 珪一 (平安高校)	…久能 副隊長
北 杜夫 (医師・作家)	…柴崎 ドクター
松田 禎夫 (京都山岳連盟副会長)	…小倉
小山 貢 (専売公社)	…増田
中山 幹夫 (積水化学)	…関谷
高田 直樹 (桂 高校)	…竹屋
高橋 正 (積水化学)	…曾我
土森 譲 (鴨沂高校)	…羽瀬
上田 純三 (大阪高校)	…田代

…「白きたおやかな峰」中の人物

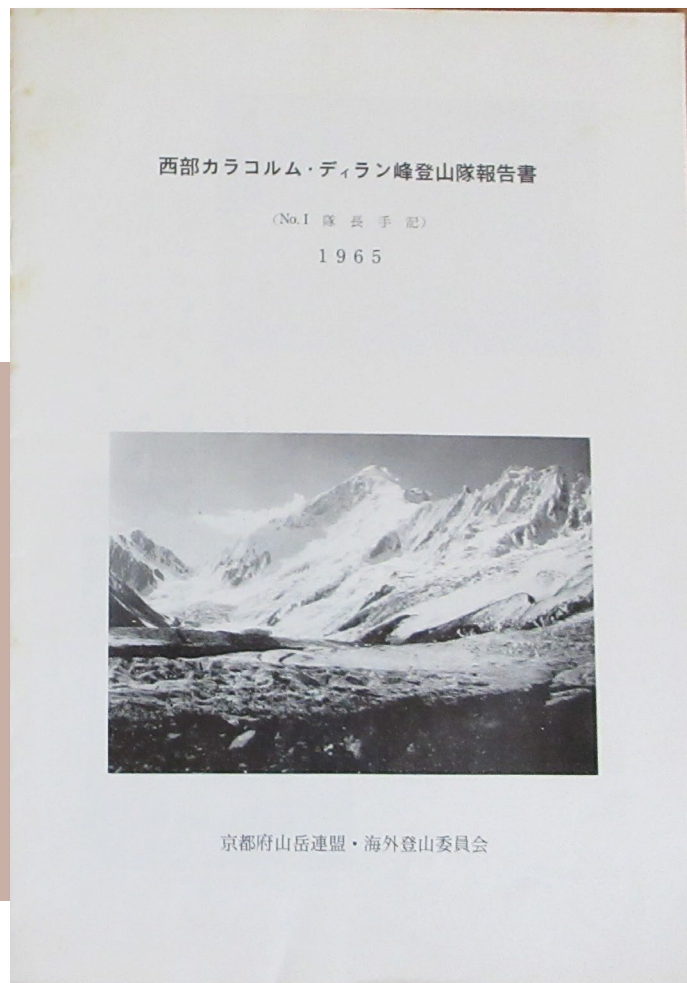
ディラン峰登山報告書

展示資料No. 32

『西部カラコルム・ディラン峰登山隊報告書』

(No. I 隊長手記)

京都府山岳連盟・海外登山委員会 1965



『西部カラコルム・ディラン峰登山隊報告書』

(No. II どくとるマンボウ・カラコルムへ行く)

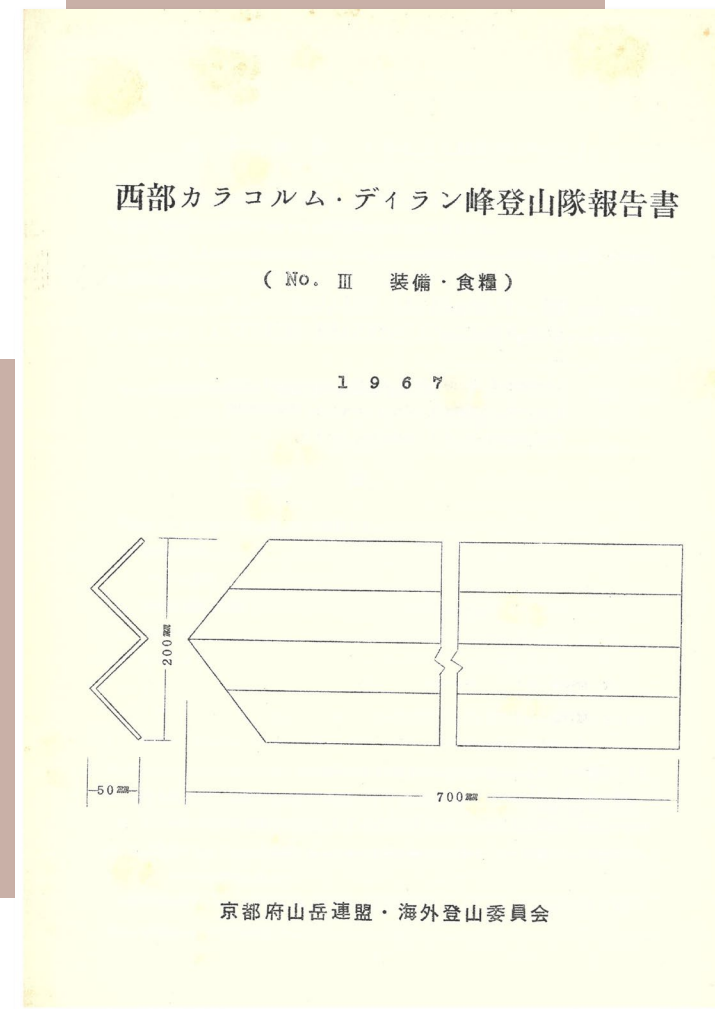
京都府山岳連盟・海外登山委員会 1966



『西部カラコルム・ディラン峰登山隊報告書』

(No. III 装備・食料)

京都府山岳連盟・海外登山委員会 1967



参考資料

1969年

『西部カラコルム・登山・調査計画書 1969』

京都カラコルムクラブ
京都府山岳連盟

(小谷コレクション)



I カンピレディオール登山隊 — 7144m —

隊員7名 (隊長:小山貢)
5月上旬~6月下旬
費用 350万円

II 辺地教育調査隊 — 教育の原型を求めて —

隊員3名 (隊長:高田直樹)
5月中旬~10月下旬
費用 150万円

ヒマラヤへの飽くなき挑戦

ディラン峰の初登頂を果たせなかった京都カラコルムクラブだが、その後もヒマラヤの未踏峰、未知のルートに挑戦し続ける。

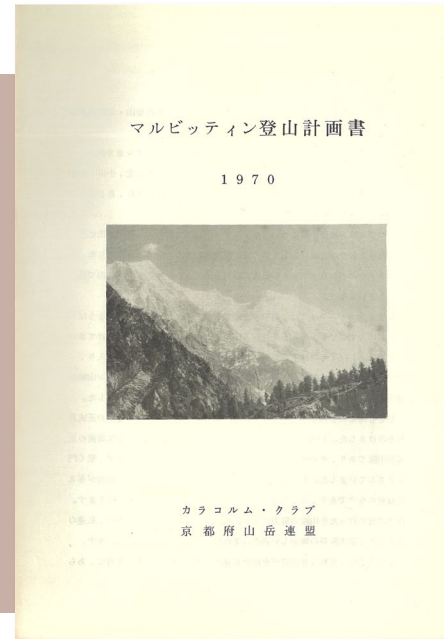
展示資料No. 33

1970年

『マルビッティン登山計画書 1970』

カラコルムクラブ
京都府山岳連盟

(小谷コレクション)



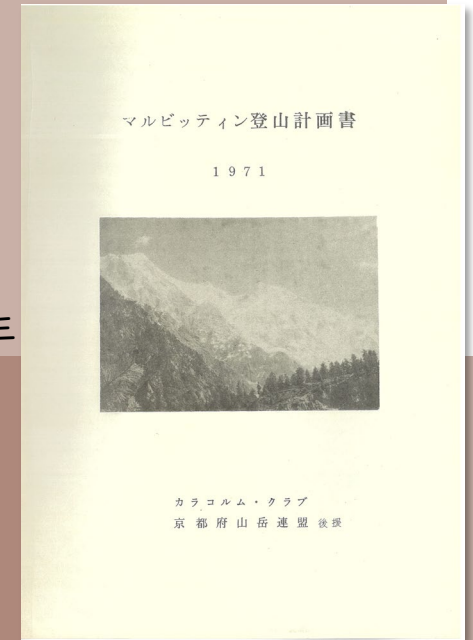
隊員14名 (総隊長:小谷隆一)
予定4月19日~6月30日

展示資料No. 34

『マルビッティン登山計画書 1971』

カラコルムクラブ
京都府山岳連盟後援

(小谷コレクション)



1971年

隊員14名 (総隊長:小谷隆一)
予定4月上旬~7月中旬

遠征期間
4月11日(出発)~6月26日

ハイポーター4人がブロック雪崩に
巻き込まれ、6500㎡で撤退

展示資料No. 35

1975年

『カンピレディオール登山計画書』

1975

京都カラコルムクラブ

(小谷コレクション)



隊員15名 (隊長:小谷隆一)
6月5日～9月30日
費用 1200万円

パキスタン政府が他の登山隊に許可
を出した為、プリアンサールに転進

展示資料No. 36

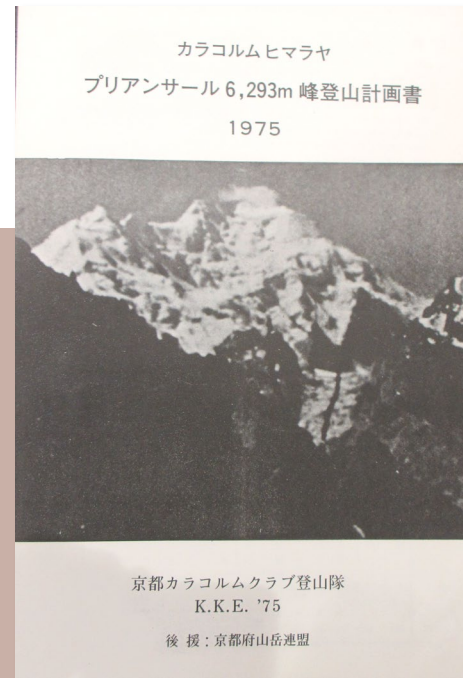
1975年

カラコルムヒマラヤ 『プリアンサール6,293m峰登山計画書』

1975

京都カラコルムクラブ登山隊K.K.E'75
後援 京都府山岳連盟

(小谷コレクション)



8名(隊長:堀田真一)
日程 6月15日～10月31日
費用 410万円
初登頂達成

展示資料No. 37

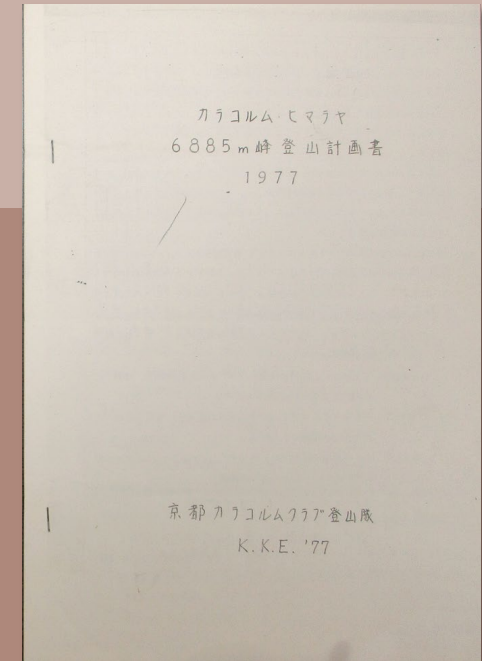
1977年

カラコルムヒマラヤ 『6885m峰登山計画書』

1977

京都カラコルムクラブ登山隊
K.K.E '77

(小谷コレクション)



隊員7名 (隊長:尾上政弘)
日程 8月中旬～11月中旬
費用 420万円

5. 京都府山岳連盟

－海外の高峰をめざす－ (3)

ディラン峰遠征から15年、京都カラコルムクラブは数々の遠征を試みます。初登頂成功もあれば撤退もあったが、小谷の指揮した遠征では隊員を失うことはありませんでした。

1980年、中国側からの挑戦となるcongool山を遠征目標とします。この決定には登山許可の窓口であった中国登山協会幹部と小谷との信頼関係によるところが大きくありました。

1980年に先遣隊として現地を訪れ、成功に期待を膨らませたが、翌1981年に総隊長として臨んだ本隊では、北稜ルート of 隊員3名の遭難をとまなう、失敗に終わりました。このことは小谷の心に深く刻まれることとなります。

1986年、それまで外国に門戸を閉ざしていた太白山に中国山岳協会の招きで、友好登山をすることになりました。

ここで、小谷は長らく親交のあった史占春中国山岳協会主席が‘congool山のⅡ峰北稜ルートは小谷の隊がくるまで他の登山隊には登らせない’という特別の思いを知り、再びcongool山に挑む決意をします。

1989年、周到な準備を行い、遠征隊は出発します。小谷は総隊長として現地を訪れます。登山報告書には登頂成功の報を聞いて感激のあまり、涙が止まらなかったと自ら記しています。

パミールの高峰へ

コングール山 (Kongur、公格尔山) 7,719m

場所 : 中華人民共和国新疆ウイグル自治区アクト県
位置 : 38° 35' 38" N, 75° 18' 48" E
初登頂 : 1981年イギリス・ボニントン隊



コングール山遠望 (1989年撮影)
写真 (小谷隆一アルバムより)
小谷達雄氏 蔵

同人雑誌『千里眼』への寄稿 小谷自筆原稿

- ・パミールの高峰をめざして
- ・中国登山協会との折衝
- ・北京からウルムチへ
- ・ウルムチにて
- ・ウルムチ周辺
- ・カシガルへ向かう
- ・カシガル(1)

小谷達雄氏 蔵

1980年までのコングール登山について、
小谷総隊長の視点から見た遠征の軌跡が
詳細に記されている。

小谷隆一

パミール峰をめざして
十二月の北京の街は肌を締めつけるような
寒気がおそってくる。朝方の空気は、日本の
都市では感じられないほど乾燥しており、言
いの上で味えるあの清々しい大気と想像せ
身全体がひきしまるような快さである。
その冷気の中に身をこらし、三十分はかり王
府井の大通りを散歩する。取場へいそぐ老若
男女の群れが、それぞれ自転車や徒歩で忙し
そうにかつぬけてゆく。中口の大会で常に
みられる早朝の風景である。
宿舎の北京飯店へ入り、すっかり冷えさつ
た身体を暖かい部屋で暖房であたためる。し
ばらく待っていると、約束した午後五時に
中国登山協会副会長の許競武が部屋を訪れ
てくれた。私とは同年輩の五十代の半ばと
いった年恰好で、大柄な方がそれほど大男
という体格ではない。山で田やけた浅黒い
顔をしており、バランスのよい身のこなしよ
うである。堅い握手をして椅子に腰かける。

パミールの高峰をめざして

十二月の北京の街は肌をしめつけるような寒気がおそってくる。その上、朝方の空気は、日本の都市では感じられないほど乾燥しており、高山の上で味わえるあの清々しい大気を思わせ、身体全体がひきしまるような快さである。その冷氣の中に身をさらし、三〇分ばかり王府井の大通りを散歩する。職場へいそぐ老若男女の群れが、それぞれ自転車や徒歩で忙しそうにかけぬけてゆく。中国の大都会で常に見られる早朝の風景である。

宿舎の北京飯店へ戻り、すっかり冷えきった身体を暖かい部屋の暖房であたためる。しばらく待っていると、約束した九時半丁度に中国登山協会副会長の許競氏が部屋を訪れてくれた。

(中略)

十二月中旬に帰国した私は、急きょ山の仲間を集め、中国登山の目標について討議を行った。目標の山を、許競氏と別れぎわに話したコングール峰に定めるのにはそれ程時間はかゝらなかった。その山が未踏峰であり、私どもが専念していたカラコルム山域の北部に位置し、いわばカラコルムの山の親戚のように思えたからである。

早速資料集めにとりかかった。まず最初に見出したのは、日本山岳会会報である「山岳」昭和十六年発行分に望月達雄氏が執筆しておられる「コングール山群」であった。二十頁に及んでスクラインの踏査を中心に記述され、概念図もつけておられる。目指す主峯についての記述は全くないが、この付近の山岳の概念を知るためには貴重な資料だった。

(後略)

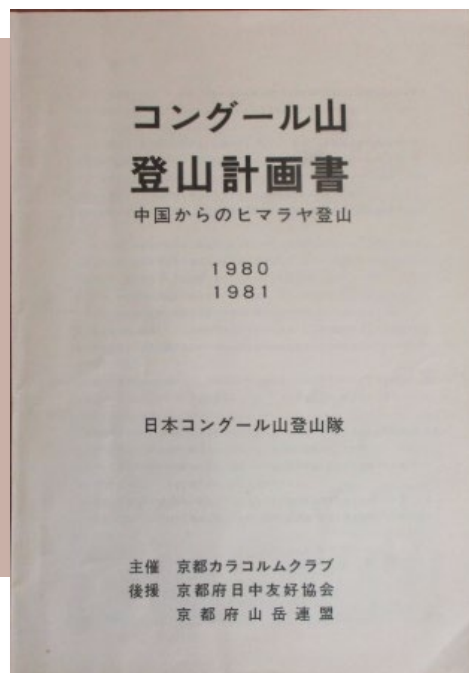
※ クラーモント・スクライン [C. P. SKRINE] は英国カシュガル総領事
『CHINESE CENTRAL ASIA』(1926)

展示資料No.39

『コングール山登山計画書』
中国からのヒマラヤ登山
1980 1981

日本コングール山登山隊
主催 京都カラコルムクラブ
後援 京都府日中友好協会
京都府山岳連盟

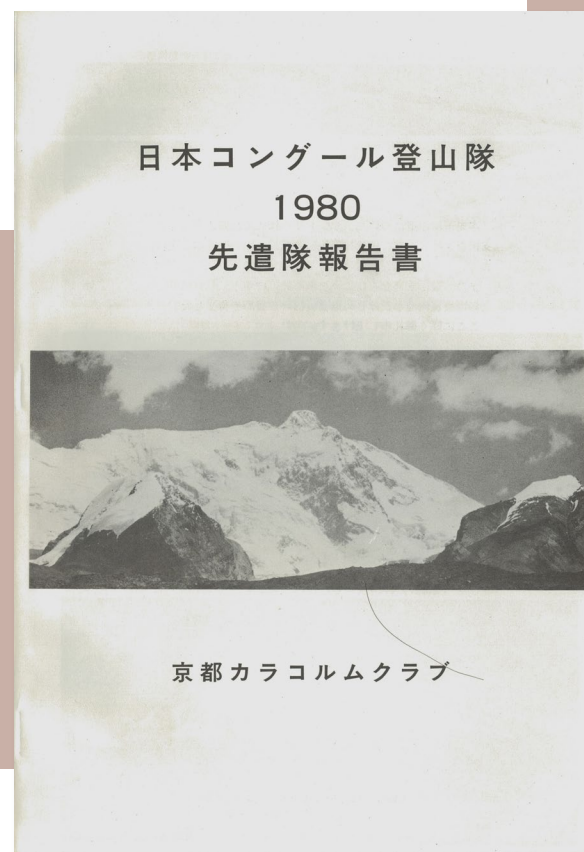
(小谷コレクション)



1980・81年

展示資料No.40

『日本コングール登山隊
1980
先遣隊報告書』
京都カラコルムクラブ
(小谷コレクション)



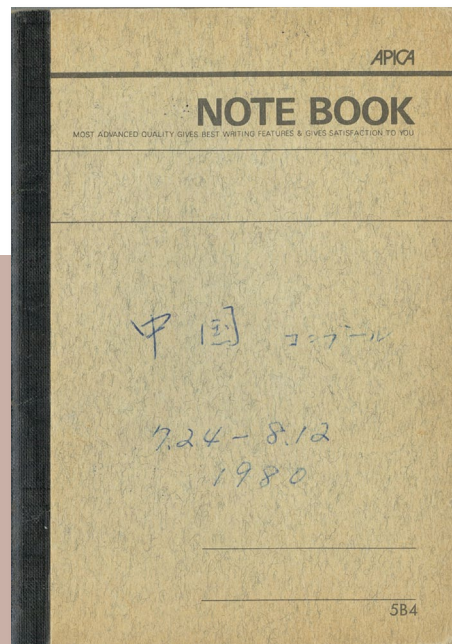
期間
7月23日出国 ～ 8月30日帰国
隊員
日本7名、中国3名
総隊長:小谷隆一(56才)
隊長:塚本珪一(49才)

展示資料No. 41

日記

『中国コングール
7.24～8.12
1980年』

小谷達雄氏 蔵



先遣隊遠征に関し、小谷が日本出発から帰国までを細かく記録した日記。

自然や住民の生活なども興味深く観察して記述している。



8月2日 BCにて(1980年撮影)

写真(小谷隆一アルバムより) 小谷達雄氏 蔵

『コングール登山計画書』

シルクロードからのヒマラヤへ
1981

日本コングール山登山隊
京都カラコルムクラブ
(小谷コレクション)

コングール登山隊本隊

6月1日出国
～8月18日

隊員

日本7名、中国3名

総隊長 小谷 隆一(56才)

隊長 高田 直樹(44才)

副隊長 土森 譲 (43才)

結果

東稜隊 登頂断念

北稜隊 遭難

BCにて(1981年撮影)

写真(小谷隆一アルバムより)

小谷達雄氏 蔵

7月23日

北稜隊3名が傘岩(6,450m)の上部に登攀中の10:30の交信を最後に消息を絶つ。

※同日 小谷は総隊長として現地に向けて日本を出発

隊員 16名

総隊長 小谷 隆一

隊長 高田 直樹

学術調査隊長 塚本 圭一

期間 5月上旬～8月下旬

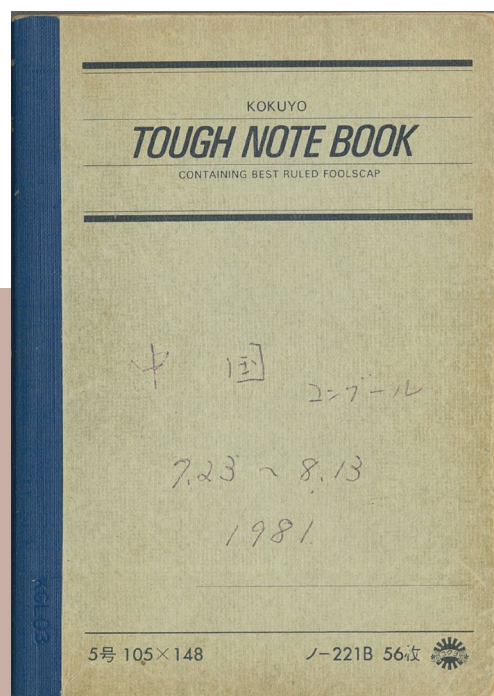
予算 ￥50,058,000

「1980年に頂上へ向かって行った3人の隊員が、結局帰ってきませんでした。遭難してしまったのです。最後はどういう風になったのか分かりませんし、もちろん死体も出てきていません。回収も出来ないような場所なのです。総隊長の小谷さんは、当時京都商工会の会長でしたが、帰国時に一瞬にして髪の毛が真っ白になって、大変でした。3人の隊員の最期がどういったものなのか分からない、と皆が悩みました。」

副総隊長:塚本圭一氏

2017年10月5日環境省インタビュー記事(Web)引用

日記
『中国コングール
7.23～8.13
1981年』
小谷達雄氏 蔵



本隊遠征において、総隊長として小谷が現地に向けて日本を出発から帰国するまでを綿密に記録した日記。

北稜隊の遭難、東稜隊の撤退などの困難に直面した時の心情もつづられている。

『中国コングール 7.23～8.13 1981年』 日記より

7月30日

北稜隊は傘岩の上部で待機しているとのことで一安心する。

7月31日

3人の音信が不通なのでとても心配だ。強い連中ばかりだが…
11:30テントに入ったが心配でねられない。

8月1日以降 北稜隊の状況把握と分析を行い、搜索を試みるが悪天候等により難航する。日を迫うごとに絶望的な観測となる。

8月6日

(前略) この辺りからコングールの主峰がはっきり見えてくる。昼食を食べる辺りからチューベが快晴の空にくっきり見えていたが、その後主峰が見え出した。傘岩から3人がたどったルートがよく判別できる。すごい壁だ。この壁を30分かけて完登している。たしかにすごい技術を持った連中だ。どこかこの美しい山中に眠っているのかと思うと非常にかなしい思いにかられる。

この昼会の誰かが日本人3人中2人が生きて還って来たというニュースを森本さんに伝える。それを聞いてホッと、BCへいそいで着くようにする。1時間余りの間、2人が生きていることはすばらしいと安堵の気持ちにかられる。先をゆく陸サンらにおいつこうといそぐ。

Base Campについたのは18:30 やはり2人生還はデマだった事が判りがっかりする。(後略)

8月7日

（前略）17:00頃 傘岩の附近の雲がきれて数分間だけのことだが頂上へのルートなどが眺められた。だんだん雲が下りて来て、18:00頃には雲にかくれてしまった。僕としても最後の遠征 しかもその最後の夕方ということになるだろう。感慨深い。これで無事に成功して帰るのならよいが、とても淋しい気持ちだ。15分おきくらいに大きな雪崩の音がする。どこだか判然としない。

9時ごろキリ雨の降っている中をケルン建設予定地を見にゆく。キャンプ地より100m余上に少しコブになったようなところがあり、その中にケルンをつむこととし、先となる様な石だけおく。（後略）

8月8日

（前略）9:40 ケルンのところに集合する。3人宛の奥サンからの手紙、3人ならんでムスターグでうつした写真を入れ、ケルンの型に積み上げる。（後略）



北稜隊（嶋満則、寺西洋治、松見新衛）の遭難慰霊ケルンの前で

写真（小谷隆一アルバムより） 小谷達雄氏 蔵

展示資料No. 44

1989年

『かがやく峰 Kongur』

1989年日本コングール登山隊報告書

京都カラコルムクラブ

1994年5月27日刊

京都府山岳連盟 蔵



1989年日本コングール登山隊



隊員 日本15名、中国6名

名誉総隊長	谷垣 禎一 (44才)
総隊長	小谷 隆一 (64才)
副総隊長	塚本 圭一 (58才)
隊長	安田 越郎 (40才)
登攀隊長	須藤 建志 (39才)

友好の登山へ

太白山(Taibai) 3,767m

場所 : 中華人民共和国陝西省宝鶏市太白県
位置 : 33° 57' 24" N, 107° 45' 54" E
※ 到達は2,900m地点まで

日中友好 中日友好
京都府 陝西省 陝西省 京都府
太白山聯合登山隊
1986



太白山遠望 (1986年撮影)

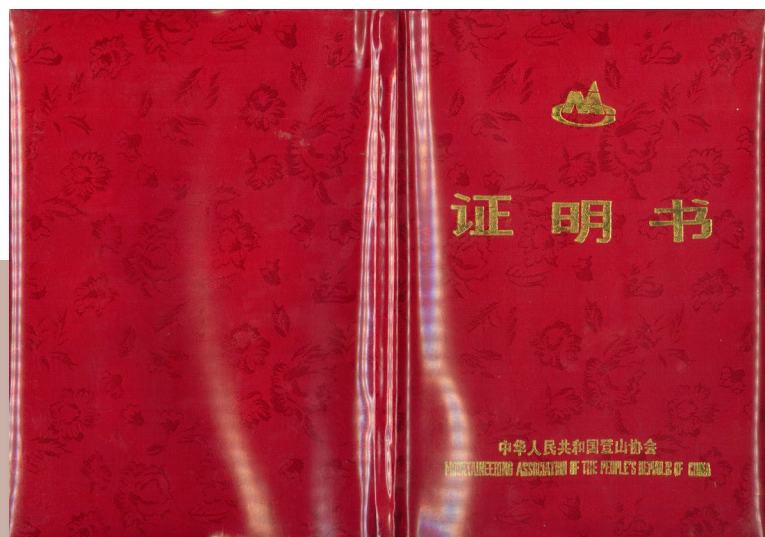
写真(小谷隆一アルバムより) 小谷達雄氏 蔵

展示資料No. 45

証明書

中華人民共和国登山協会
太白山 1986年5月6日

(小谷コレクション)



パミール高原の未踏峰コングル山の初踏破をめざし、中国当局に登山許可を求めて動いていた小谷達は、支援をあおいだ中国登山協会との数々の交流を通し、互いに親睦を深めていった。そして、それまで外国人に開放されていなかった太白山での日中友好登山が開催された。



『原稿 太白山登山』

小谷隆一直筆原稿

小谷達雄氏 蔵

『原稿 太白山登山』

1973年以来、私は数回にわたって西安の地を訪問しました。そしてそのたびに、登山が好きなら陝西省には太白山という高い山があるよ、と聞かされました。太白山の名前を耳にするとき、すぐ連想するのは中国の詩聖ともいべき詩人、李白のことでした。

(中略)

登山許可を申請して以来、京都岳連の幹部はどのような体制で登山を展開するか熱心に協議しました。その結論の第1は、できるだけ多くの隊員をつのること、しかも一般公募を行なうこと、第2に日中友好、特に若い中国の友人に登山技術を教えること、でした。安全な楽しい山登りをすることは言うまでもないことです。

(後略)

Name 小谷隆一 No. 1

Theme 1973年以来、私は数回にわたって西安

太白山登山

の地を訪問しました。そしてそのたびに、

登山が好きなら陝西省には太白山という高い

山があるよ、と聞かされました。太白山の名

を耳にするとき、すぐ連想するのは中国の詩

聖ともいべき詩人、李白のことでした。

日本人好きのする李白の詩は私どもに親し

みやすく、特に

雨人對酌 山花開く

(20×10)

太白山合同登山隊報告用箋

『原稿 御礼(太白山登山)』

小谷隆一直筆原稿

小谷達雄氏 蔵

このたびの太白山登山のために一方ならぬご尽力をたまわった、陝西省李慶偉省長をはじめ陝西省人民政府の方々、ならびに中国登山協会史占春会長・許競福会長はじめ協会の皆さま方に心から厚く感謝の意を申し上げます。(中略)

最後にもう一度繰り返します。太白山はそれほど高い山ではありません。しかし、中国の友人15名を加えた60名の大登山隊が一つの事故もなく登攀を終えたのは成功であり、また特に、日本と中国との友好を深めえたのは大きな収穫でありました。

その成功をもたらすことの出来たのは、あらゆる面において中国の友人たちのあたたかい支援があったからであります。陝西省李省長を中国登山協会史会長はじめ多くの中国の友人の皆さま方に、かさねて厚く御礼申し上げます。

Name
小谷隆一

Theme

御礼

このたびの太白山登山のために一方ならぬ
ご尽力をたまわった、陝西省李慶偉省長はじめ
陝西省人民政府の方々、ならびに中国登山
協会史占春会長・許競福会長はじめ協会の皆
さま方に心から厚く感謝の意を申し上げます。
私がはじめて、中国登山協会の幹部として
の許競福さんにお会いしたのは、1979年の
12月初旬、凍てつくように寒い朝の北京餃
店の一室にあってでした。その年中国が外口
人登山家に好んで解放した8つの山群に属し

太白山合同登山隊報告用箋

(20×10)

『山なみ帖』

あとがき

小学生の頃からスキーを始め、中学三年の時に山岳部に籍をおいた。爾来、山を愛し続けてもう四十年の歳月が流れてしまった。もっとも、ずっと絶え間なく山登りを続けているのではなく、日常の仕事の繁忙にさまたげられて、時には丸一年、二年と山にご無沙汰していたこともある。しかし、ここ数年は欧州出張の際にも必ずスイスの山歩きをして、山に親しむことにしている。そして、昨年の夏には中国新疆省のコングル峰の偵察行に出かけ、本登山の今年もまた現地までおもむく予定である。

山登りで得たもの、私にとってそれははかり知ることができない。健康な身体、判断力、決断力、さらに尊い友情と、人間形成のための柱となっているものは、すべて山を通じて会得したといっても過言ではない。そして、私はこのような登山を許してもらった亡父と母とに限りない感謝の念をいだいている。とくに、父は登山の経験は持つていなかった。それだけに、一人息子の私が山に熱中することをどれほど心配していたか、今その気持を思いはかると申しわけなきで一杯である。山を知らない父は、いつも山好きの友人達から知識を得るようにし、何かと私に助言をしてくれたものだった。

四十年の間に私の登山の型も随分と変化をしていった。京都北山から奥美濃、北アルプス、さらにスイス・アルプス、カラコルム、中国パミール高原の山、と地域は拡大していった。また、激しい登山から穏やかな山登りへと、或いは山岳書の収集に熱をあげるなど、歳をとるにつれて山を愛する方法も変っていった。

（後略）

私たちにとって小谷さんは常に「隊長」であった。一九二七年に京都第二商業学校に入学され、森本次男先生の登山との出会いがある。先生の山には『京都北山と丹波高原』、『樹林の山旅』にあるように、日本の山にある深い心の糧となるものの発見があった。そして、いつの間にか「京都北山からヒマラヤへ」という言葉が生まれていた。小谷さんは森本先生の、「登山は足で登るだけのものではない」という教えを基に、松高、東大山岳部の系譜の流れを継承し、私たちもそのあり様が山行と人生のなかに存在することになる。

一九六〇年代に入り、小谷さん宅の数多くの山岳文献の並んだ明るい部屋に数名の青年が集まり、山の本や地図を広げて海外の山への研究が熱っぽく始まった。それは、小谷山岳塾の開学の日でもあった。

塚本珪一氏の「小谷隆一氏追悼文」より部分引用



ー 遠征先での光景 ー



ディランへ出発の際、親友の裏千家
15代宗匠鵬雲斎宗室からもらった茶
籠(茶道具一式)を持参して茶を点て
た。客は北杜夫(写真右)

『山なみ帖』「ヒマラヤとお茶」



ディランのBaseCamp (3,300m) にてお茶
1965年



日中友好登山でお茶を一服



太白山登山にてお茶
1986年



パミール高原にて隊員のお点前披露
を受ける。



『山なみ帖 その後』「ヒマラヤでふたたびお茶を」
1980年



コングールBC (5,000m) にてお茶 1989年
石だらけの緩斜面に薄い敷物で整えた野点の席で抹茶をふるまう。
隊員たちの前にあるものは茶菓子の“羊羹”

写真(小谷隆一アルバムより) 小谷達雄氏 蔵